

知求会ニュース

2008年04月

第25号

◎ 博士前期課程、修了おめでとうございます！

2008年3月25日(火曜日)午後1時10分から国際学部A棟4階大会議室にて、2007年度学位記手渡し式が開催されました。

今年度の修了生は、国際社会研究専攻 津田安希子さん、武藤幸夫さん、安斎嘉秀さん、江上未生さん、何川さん、鄭楽静さん、永見彩香さん、包鳳英さん、楊慶杰さん、李鶴さん、劉小萌さんの11名と国際文化研究専攻 野沢健一さん、篠崎明美さん、田中遥さん、王珊蓉さん、加藤みずほさん、金多希さん、特木巴干さん、永島絵莉香さん、松平昌子さん、桃生篤さん、吉澤茂弘さん、梁濂方さんの12名、そして、国際交流研究専攻の西出幸代さん、菊入千賀子さん、金美眞さん、金裕美さん、YENGABAD JAIME FERNADOさん、バトムンフ・バトサイハンさん、楊凡さん、楊淑玲さん、李帥さん、劉氷さんの10名で、計33名でした。今年度の修了生の主な進路は進学4名です。就職状況は、現在調査中です。17年度より、学業優秀者に贈られる宇都宮大学奨学金(奨励賞)に、国際学研究科の1名として金裕美(国際交流研究専攻)さんが受賞されました。

◎ 他大学大学院・修士課程、修了おめでとうございます！

2008年3月25日(火曜日)に、清地ゆき子(国際文化研究専攻・2期生)さんは、筑波大学大学院 修士課程 地域研究 研究科 地域研究専攻 東アジアコースにて、「日中語彙交流にみる恋愛用語受容の諸相 —1920年代の張資平の作品を中心に—」をテーマに学位を授与されました。なお、この修士論文は地域研究 研究科の優秀論文賞を授与されました。

◎ 他大学大学院・博士後期課程および博士課程、修了おめでとうございます！

2008年3月24日(月曜日)に、李尚珍(国際文化研究専攻・1期生・丁研究室出身)さんは、お茶の水女子大学大学院 博士後期課程 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻にて、「浅川伯教・巧兄弟の朝鮮理解に関する研究 —植民統治期における兄弟の朝鮮伝統工芸研究を素材として—」をテーマに、人文科学博士の学位(博甲第518号)を授与されました。4月からは、山梨英和大学人間文化学部(山梨県甲府市)の助教としてご活躍が期待されます。

2008年3月25日(火曜日)に、土屋伸夫(国際文化研究専攻・1期生・岡田研究室出身)さんは、筑波大学大学院 博士課程 人間総合科学研究科 芸術学専攻にて、「デザインギャラリー—銀座・松屋の研究 —デザインギャラリー—展の理念とその運営—」をテーマに、芸術学博士の学位(博甲第4804号)を授与されました。

◎ 博士後期課程、進学おめでとうございます！

山田勝也(国際社会研究専攻・6期生)さんが、2008年4月から京都府立大学大学院 生命環境科学研究科 環境科学専攻に進学されます。

金 多希(国際文化研究専攻・8期生)さん・金 裕美(国際交流研究専攻・3期生)さん・楊 凡(国際交流研究専攻・3期生)さんの3名が宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻に進学されます。

鄭 楽静(国際社会研究専攻・8期生)さんが、京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程 共生文明学専攻に進学されます。

◎ 教職員人事異動

鯨井佑士 名誉教授

地球文化形成研究講座の鯨井先生が3月31日付で定年退職されました。宇都宮大学には1968(昭和43)年4月から在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。後任には公募で田口卓臣先生が着任されました。

軍司 敏 名誉教授

地球文化形成研究講座の軍司先生が3月31日付で定年退職されました。宇都宮大学には1974(昭和49)年4月から在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。後任には公募で田口卓臣先生が着任されました。

井澤元一 事務長

国際学部事務長の井澤さんが3月31日付で定年退職されました。井澤さんは、宇都宮大学勤続41年で2006(平成18)年4月から2年間、国際学部事務長として、今日の国際学部の発展を事務方として支えられました。永い間、お疲れ様でした。後任には大学本部総務課から課長補佐・小島啓重さんが4月1日付で着任されました。

黒澤衣受美 国際学部総務係員

総務係員の黒澤さんが4月1日付で教育学部総務主任に昇任されました。後任には小山工業高等専門学校から川島則子さんが4月1日付で着任されました。

◎ 着任教員紹介その8

清水奈名子 (SHIMIZU Nanako)

専門：国際関係論 国際機構論

前職：大学助手・非常勤講師

趣味：文学鑑賞 音楽鑑賞 お菓子作り

自己紹介：2007(平成19)年の10月に着任しましたので、ようやく最近になって周りが見渡せるようになりました。私の研究テーマは、国際機構や国際法などの制度的・規範的要素が、世界の秩序形成といかなる関係にあるのかを考察することです。具体的には、冷戦後に国際連合の安全保障体制がどのような機能を果たしているのかについて研究していま

す。国際社会はしばしば無秩序な自然状態として説明されてきました。テロや武力紛争が頻発する現代では、その説明がさらに説得力を増しているようにも聞こえます。しかし、本当に国際社会にはいかなる秩序も規範も存在しないのでしょうか。大学院の学生時代から、国連機関をはじめとする国際機構の活動を研究することで、国際社会における規範的秩序の可能性を探求してきました。大学院の授業では学生の皆さんとの議論を通して、この研究課題についての考察をさらに深めていきたいと願っています。

◎ 2月入試合格結果

国際社会研究専攻 一般 1名・社会人 1名・外国人2名 計 4名
国際文化研究専攻 一般 4名・社会人 2名・外国人4名 計 10名
国際交流研究専攻 一般 3名・社会人 0名・外国人 3名・
国際交流・国際貢献活動経験者 0名 計 6名 合計 20名

◎ 宇都宮大学各学部等同窓会連絡協議会報告

平成19年度第三回の会合が、2月16日(土)午後3時から宇都宮大学第2会議室で開催されました。出席者は菅野長右エ門 学長・水本忠武 理事・海野 孝 理事・山本純雄 理事・鹿野芳郎 理事の大学側5名と事務局担当者8名、吉葉恭行 国際学部同窓会会長・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・小林春雄 教育学部同窓会会長・柴田 毅 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・直之 進 工学部同窓会会長代行(同副会長)・柴田敏明 同副会長・和賀井睦夫 農学部同窓会会長・笠原義人 同副会長の同窓会側9名でした。議事内容は、検討事項として、1. 各学部同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。連絡協議会終了後、大学会館2階で懇親会が開催されました。

なお、記録写真は国際学部 HP に掲載されています。<http://www.afis.jp/>

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞(平成19年12月2日発行)に、**田巻松雄**先生らによるシンポジウム「栃木県における外国人児童生徒の教育の明日を考える 2007」に関する紹介記事「日本語教諭が不足」が掲載されました。
2. 下野新聞(平成19年12月7日発行)に、**国際学部**が設立する「多文化公共圏センター」に関する紹介記事「国際交流の課題探る センター設立控え 自治体と意見交換」が掲載されました。
3. 東京新聞(平成20年1月17日発行)に、**北島 滋**先生による「街へ誘う」と題する寄稿文「中心市街地 餃子食べて街中散策へ」が掲載されました。
4. 東京新聞(平成20年1月24日発行)に、**北島 滋**先生による「街へ誘う」と題する寄稿文「まちづくり3法 シャッター通り促進法？」が掲載されました。

5. 東京新聞(平成20年1月31日発行)に、北島 滋先生による「街へ誘う」と題する寄稿文「空洞化対策 郊外立地禁止特区を」が掲載されました。
6. 東京新聞(平成20年2月7日発行)に、北島 滋先生による「街へ誘う」と題する寄稿文「『神学論争』 正しい解答のない難問」が掲載されました。
7. 東京新聞(平成20年2月14日発行)に、北島 滋先生による「街へ誘う」と題する寄稿文「空洞化のとらえ方 『街の顔』は変わっても」が掲載されました。
8. 東京新聞(平成20年2月21日発行)に、北島 滋先生による「街へ誘う」と題する寄稿文「F市長の政策 市街地のにぎわい再び」が掲載されました。
9. 東京新聞(平成20年2月28日発行)に、北島 滋先生による「街へ誘う」と題する寄稿文「日野町通りとは 人通り少ない街並み」が掲載されました。
10. 東京新聞(平成20年3月13日発行)に、北島 滋先生による「街へ誘う」と題する寄稿文「ひのまちルネッサンス 自由な発想が参加呼ぶ」が掲載されました。

◎ 新刊案内

本年4月1日に、中村祐司先生が主宰する行政学研究室の研究成果である『地域・自治体・大学による連携・協働』というブックレット第1号が刊行されました。

◎ 国際学部だより

国際学部1期生の志村なぎささんが、東京福祉大学の講師に就職されました。国際学部としては、山梨英和大学の李さんと同時に大学教員になられ、今後の研究・教育分野へのご活躍が期待されます。

研究室訪問 16 第9号から国際学研究科に係る内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第16回目には、地球文化形成研究講座所属の鯨井佑士先生にお願いしました。軍司先生については、次号の知求会ニュース第26号で掲載します。

「私の研究について」

鯨井佑士

私はこの3月末日をもって、宇都宮大学を定年退職いたします。教養部で26年、国際学部では14年、あわせて40年間宇都宮大学で教えたこととなります。土屋会長より私の研究について書くようにという依頼がありましたので、この40年間を振り返って、私の研究歴とか研究の成果について少し以下に書いてみることにします。

私は、学部は東京外国語大学のフランス科、大学院は東京大学人文科学研究科で、それぞれ、フランス語及びフランス文学を専攻しました。従って、当時の言い方言えば、私は「仏語仏文」の出身ということになります。私は、学部の卒業論文でフランス革命期の詩人アンドレ・シェニエを取り上げました。以後、修士論文から今日に至るまで、一貫して

この詩人の研究を続けています。これが私の研究の核になっています。1998年に、それまで大学の紀要や研究誌に発表してきた論文を集大成して『アンドレ・シェニエとその時代』（駿河台出版社）という本にまとめました。これが、現在、私の代表的研究成果ということになるでしょう。

アンドレ・シェニエについては、フランスにおいても専門家は少数ですが、日本においては、かつて、私より先輩の方でこの詩人を専門にしている人が二人いたのですが、二人とも亡くなられましたので、現在は私一人になりました。それで、ときどき、何かの加減でこの詩人のことが話題になると、私が問い合わせを受けることになります。先年、新国立劇場で、イタリア・オペラの『アンドレア・シェニエ』が上演された時は、頼まれてパンフレットに解説文を書きました。それから、10年ほど前に、集英社から『世界文学大辞典』が発刊された時は、アンドレ・シェニエを始めとするフランス18世紀の群小詩人について多数の項目を執筆しました。

私は、1971年から2年間、フランス政府給費留学生としてフランスのパリ・ソルボンヌ大学（現在のパリ第4大学）に留学しました。このときの体験はその後の教育及び研究の両面にとって、大変貴重な経験でした。当時、フランスは、文学研究の方法論として、いわゆる「新批評」が全盛でしたが、私自身はそれに興味を持ったものの、全面的に追随することはしませんでした。今でもこれは正しかったと思っています。研究の方法論については、あまり流行を追わず、自分の直感を信じて、対象とじかに向き合うことが大切だと思います。

国際学部が発足してからは、私が担当する授業科目は、フランス語とフランス文学ではなく、フランス語とフランス文化論に変わりました。これは、学部の趣旨・目的からしてそうなったわけですが、単に文学について講義するのではなく、文化全般について幅広く教えることが求められたわけです。これに対応するべく、私自身も研究領域を広げるよう努力を続け、かねてから興味があったフランスの食文化についての勉強を始めました。そして、特に、先のシェニエとも時代が重なる18世紀末から19世紀前半にかけての美食評論に行き着きました。この分野は、フランスにおいてもまだ研究が始まったばかりですが、実に興味深く、現代のグルメ文化はこの時代に始まると言っても過言でないほどです。ブリヤ＝サヴァラン、グリモ・ド・ラ・レニエールといった人物について論文を準備していたのですが、時間切れで発表できなくなり残念です。今後とも研究活動は続けるつもりですので、いずれ何らかの形で成果を発表したいと考えています。

研究は楽しい時もありますが、大部分は辛気臭い作業の積み重ねです。また、行き詰まりや躓きもしょっちゅうあります。大学院の皆さんは各人のテーマについて着実に研究を進め、それを論文としてまとめる努力をしてください。皆さんが大きな研究成果を挙げるよう祈っております。

なお、私自身は、4月以降放送大学栃木学習センターに勤めます。従って、峰キャンパスには引き続き通っていますので、見かけたら声をかけてください。

博士録 02 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 2 回目には、今春筑波大学大学院 博士課程 人間総合科学研究科 芸術学専攻を修了された、**土屋伸夫**(国際文化研究専攻・第 1 期生)さんにお願ひしました。

「博士課程を終えて」

土屋伸夫

私は、国際学研究科国際文化研究専攻で第 1 期生の土屋です。また修士課程修了後から大学院同窓会を運営してきたものです。そして、先月 25 日に筑波大学大学院 一貫制博士課程 人間総合科学研究科 芸術学専攻(平成 19 年度から人間総合科学研究科 博士課程(前期・後期)芸術専攻に組織を改組再編)を 5 年間の課程で無事修了しました。振り返って見ると、長いようで短かった気がする充実した研究生活でした。

まず簡単に、筑波大学大学院の様子を紹介します。(すでに、国際学部出身である人文社会科学研究科の志村なぎささんと梁 智英さんの投稿があります。知求会ニュース第 14 号、第 19 号をご参照下さい。) 私の所属している人間総合科学研究科は、筑波大学大学院に存在する七つある博士課程研究科の一つです。他の研究科は、人文社会科学研究科・ビジネス科学研究科・数理物質科学研究科・システム情報工学研究科・生命環境科学研究科・図書館情報メディア研究科です。このほかに、修士課程研究科として清地さんが所属した地域研究科をはじめ、体育研究科・教育研究科・人間総合科学研究科の四つがあります。また専門職学位課程研究科として、ビジネス科学研究科があります。人間総合科学研究科は、人間系 3 研究科(教育学、心理学、心身障害学研究科)と専門系 2 研究科(体育科学、**芸術学研究科**)および医学研究科が連携し、共通の研究対象である「人間」を軸に、従来の枠を越える人間に関する総合科学をめざす博士課程研究科として発足し、現在 17 専攻に分かれています。詳しくは、以下の HP へアクセスして下さい。

(<http://www.tsukuba.ac.jp/organization/graduate.html>)

芸術学専攻は、私が所属する**芸術学分野**とデザイン学分野に大きく分かれています。さらに、芸術学分野には、美学・芸術学、美術史領域と私が所属する**美術論、芸術教育論領域**、および美術制作を伴う洋画・日本画・彫塑・書の各領域があります。また、デザイン学分野には、総合造形・構成・視覚伝達デザイン・生産デザイン・環境デザイン・建築デザインの各分野があります。現在の学生数は、一貫制博士課程に総計 49 名(休学者含む)と博士後期課程に 20 名が在籍しています。大学の統計資料(平成 19 年 3 月 1 日現在)から修士課程を除く人間総合科学研究科の規模を見ると、大学教員 651 名、研究員 11 名、職員 144 名、学生 903 名です。全教職員と全博士課程の学生数である大学教員 1,716 名、職員 1,765 名、学生 4,403 名と比較すると、すなわち人間総合科学研究科における大学教員の割合 37.9%、職員 8.2%、学生 20.5%という数字から、改めて大学院組織の巨大さが実感できます。

博士課程の知を担う図書館概要を見ると、施設は 5 館(中央図書館、**体育・芸術図書館**、

医学図書館、図書館情報学図書館、大塚図書館)体制で、夜間 22 時まで開館しています。蔵書は、図書の和書で 1,446,300 冊、洋書で 979,600 冊、雑誌の和書で 13,700 種、洋書で 9,200 種を職員 74 名(館長含む)で運営しています。利用者数は、入館者 1,036,700 人(3,200 人/日)、貸出利用者数 146,900 人(450 人/日)、貸出冊数 405,200 冊(1,200 冊)という概要になっています。ちなみに、宇都宮大学附属図書館の概要は、蔵書では和書 438,435 冊、洋書 146,441 冊という数字を示し、入館者は本館 178,542 人、工学部分館 36,922 人の合計 215,464 人になっています。昨今は IT の貢献で、Webcat などの図書検索が有効に運用されています。そのおかげで、大いに他大学の図書館が身近になりました。ぜひ、知求会の皆様にも活用して欲しいものです。

私が入学する切っ掛けになったのは、宇都宮大学大学院の国際学研究科に在籍していた時に遡ります。当時、学芸員の資格を取得したいと考え、放送大学で学芸員に必要な科目を履修しながら準備を整えていました。後は実習のみの段階となり、石浜昌宏先生の情報を手掛かりに、筑波大学の「博物館学実習」の科目履修生として、学芸員出身の齊藤泰嘉先生に出会ったのが最初でした。その後、他大学大学院の受験失敗を経て、先生の門をたたいたことが現在に繋がっています。まさに、運命の出会いと言っても過言ではありません。ですから、当時ははっきりと大学院の内容・実態を把握していたとはいえません。最近になって、やっと理解しつつあるのが実感です。

後輩に向けて、他大学大学院の受験に関して、助言するならば、自分の研究領域に該当する指導者を第一に探すことが重要です。折角有名大学院に入学しながら、指導者に恵まれず、または折り合いが付かず、研究を断念するケースが同窓生に見受けられます。

入学して最初に戸惑ったことは、宇都宮時代には当たり前である前期・後期の 2 学期制から筑波方式の 3 学期制に慣れることでした。ですから、レポートは 50%増しになることでハードな履修となり、付いていくのがやっとという状態でした。また食事時間が 11:25 から 12:15 という時間帯に適応することもその一つでした。従来ののんびりムードから、まさに忙しいモードになったのが率直な感じですが。いまだに、ゆったりした昼食時間の宇都宮時代が懐かしいです。

さて、紙面が限られていますので、簡単に私の研究について述べたいと思います。国際学研究科では、「戦後日本における建築・デザインの展覧会变遷について」の修士論文をまとめました。この時には、展覧会の調査で手がいっぱいになり、踏み込んだ考察に至らなかった悔いの残るものでした。まだこの時期には長期履修制度もなく、時間の大切さを痛感したものです。この時の無念さもあって、指導教官と相談の結果、「デザインギャラリー銀座・松屋の研究—その企画展に関する芸術支援学的考察—」として中間評価論文、いわゆる修士論文に該当するものをまとめ、最終的に「デザインギャラリー銀座・松屋の研究—デザインギャラリー展の理念とその運営—」として博士論文にまとめました。私の専攻では、学位論文提出に必要な要件は、査読付き論文の 2 本が義務付けられています。もちろん、学内の査読付き論文も認められていますが、私見では専門性を高める意味において

も学会投稿論文を最低 2 本、学内投稿論文を 1 本ということが一つの目安ではないかと思
います。研究者に向けて自己アピールすることは、就職を考える上でも必要不可欠なこと
ではないでしょうか。

本論文は、戦後日本に初めて開設された銀座に立地する松屋百貨店(現・株式会社松屋 銀
座本店)の7階にある「デザインギャラリー」(現・デザインギャラリー1953)を展示空間と
して、日本デザインコミッティー(JDC)によるデザインギャラリー展の理念とその運営を検
証、考察するものです。なお、本論文では固有名詞の「デザインギャラリー」を、一般名
詞のデザインギャラリーとの混乱を避けるために、「デザインギャラリー銀座・松屋」と呼
称します。

私見ではデザインギャラリーとは、グラフィックデザイン・プロダクトデザイン・イン
テリアデザイン・建築デザインなどの企画展を行う場です。原則的にはコレクションを持
たないで、企業や団体による無料公開(貸画廊での開催も含めた)の社会活動および社会貢献
の場です。つまり、企業メセナ(芸術文化支援)そのものであり、特にデザインの啓蒙を主眼
とします。

1953(昭和 28)年にミラノトリエンナーレ出品の集いから、国際デザインコミッティーが
生まれました。創立メンバーは、<建築>丹下健三、清家 清、吉阪隆正 <インダストリ
アルデザイン>柳 宗理 <インテリア>剣持勇、渡辺 力 <グラフィック>亀倉雄策
<写真>石元泰博 <絵画>岡本太郎 <評論>勝見 勝、瀧口修造、浜口隆一 <顧問>
坂倉準三、前川國男、シャルロット・ペリアンといった錚々たる人達です。1954(昭和 29)
年、日本で初のグッドデザイン運動が、銀座・松屋 7 階売り場の「グッドデザインセレクト
ション」という小さなスペースから始まりました。そのセレクトションを、国際デザインコ
ミッティーが引き継いだのがグッドデザイン運動の起源です。1959(昭和 34)年に、グッド
デザインコミッティーと改称し、さらに 1963(昭和 38)年に、日本デザインコミッティー
(JDC)と改称され今日に至っています。

1964(昭和 39)年に、常設の「デザインギャラリー」が銀座・松屋 7 階に開設され、JDC
主催で現在も継続している活動です。2008(平成 20)年 4 月上旬現在で第 644 回を迎えてい
ます。なお、JDC 初代理事長(1967-76 年)の勝見は第 13 回《マックス・フーバーのグラ
フィック・デザイン》(1965 年)に代表される延べ 24 展、2 代目理事長(1976-78 年)の清家
は第 40 回《つぎ手と道具展》(1967 年)に代表される延べ 7 展、3 代目理事長(1978-97 年)
の亀倉は第 25 回《鳥》(1966 年)に代表される延べ 39 展のデザインギャラリー展の企画に
関わりました。それらの展示の詳細はまだ、明らかにできていませんが、展覧会案内状(は
がき)を手掛かりに、その展覧会の様子を窺うことができます。

デザインギャラリー銀座・松屋のデザインギャラリー展は 1964(昭和 39)年開催以来、す
でに 45 年を迎え、成熟したといっても過言ではありません。しかしながら、さまざまなデ
ザインギャラリーの開設、そして競合の中でその存在を改めて再認識する時期に来ていま
す。

その他の私の投稿論文に関する概要について、詳しくは CiNii (論文情報ナビゲーター) に「デザインギャラリー」のキーワードを入力されて、ご参照下さい。(<http://ci.nii.ac.jp/>)

最後に、今後の抱負は秋に第 6 回デザイン史デザイン学国際会議が大阪で開催されますので、そこで英語による発表を無事終えることと、安定した生活を望み就職活動に専念することです。そして、国際学研究科で学んだ財産は、「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」という認識です。知求会会員の皆様へ、グローバル社会におけるネットワークの重要性を伝え、この場を借りまして、皆様のご健勝と今後のご活躍を祈念しています。

知求人 07 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。 第 25 号の第 7 回目は、予定の執筆者から入稿がありませんでしたので休載になります。

フォーラム 第 4 号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。 2008 年の卯月を迎えて、皆様慌しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。) 今回は、国際文化研究専攻第 6 期生の佐々木一隆研究室 OG・江川純子さんと国際交流研究専攻第 1 期生の田巻研究室 OG・大嶋久美子さんをお願いしました。

「わたしの宝物」

江川純子

小学校教員になって、20 年余りたち、その間多少なりとも仕事上の見識を広める上での研修は受けていました。大学で専攻した中学校英語教育と離れましたが、英語とのつながりを求め、関心は持ち続けていました。小学校でも英語教育の波が押し寄せ、これは期を得たとばかり、いろいろな研究会に参加してきましたが、そのうちどうしても大学院で勉強したいとの思いが強くなってきました。そんなことから大学院生活が始まりました。職場には迷惑を掛けましたが、何とか目的を果たすことができました。

今ふり返って思うことは、あんなエネルギーと時間はどこにあったのだろう、ということ。それほどがむしゃらだったと思います。3 年間のうちには、1 回異動もありましたが、同僚の皆さんは良き理解者でした。ありがとうございます。初めの 1 年間は新幹線に飛び乗り、車内で予習などし、帰りは終電でした。確かに夜道を帰るときなど、切なくなる瞬間もありましたが、先生方も時間を融通してくださり、社会人でも授業を受けやすいように考えてくださいました。メールでの課題提出なども懐かしい限りです。その中で、英語教育や英文法について学び直したり、また自分の英語力のなさなどを痛感したりしました。でも授業では、自分の専門分野以外の講義を受けることができ、それも新鮮でした。

2 年目からは転勤になり、交通の便のいいところから通うことができましたので、通学は楽になりました。2 年目は授業少しと論文準備など、3 年目は論文に終始した感じでした。

ようか。途中、自分は修了できないのではないか、このまま中退？などとあきらめかけたこともありましたが、友人に励まされ、先生方から手篤い御指導をいただき何とか書き上げることができました。3月には、上の娘が大学を、下の娘が高校をと、親子3人同時卒業・修了となりました。

ということで、3年間の苦しくもエキサイティングな日々を超特急（新幹線？）でふり返ったわけですが、何と言っても一番の宝物は、国境を越えた、あるいは多様なバックグラウンドをもった友人や、気さくだけれども深い見識をお持ちの先生方と時間を共有できたことです。このつながりもこれからもとぎれさせることのないようにしたいと思っています。そして、少しでも自分の学んだことが社会で生かすことができればと思っています。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第6期修了生)

「近況報告」

大嶋久美子

国際学研究科修士課程を修了して早半年が過ぎた。忙しくも刺激的な学生生活を再度人生の後半部分で過ごすことができたことに、大学当局及び先生方には心から感謝申し上げたい。再度大学で勉強する機会を得ることは、夫と結婚するときの約束の一つでもあったが、家事の手抜きを受け入れてくれた家族にも感謝したい。

私の研究テーマは、かつては地域の産業の中核を担っていた林業の課題と振興について、中核的な林業家の意識調査と先進事例について述べたものである。調査研究を進めるなかで、現場に近い人たちの林業への熱い思いを共有できたことや、前向きに生きている山村の女性たちの虚飾をそぎ落とした生き方に感銘を受けたことを、今懐かしく思い出している。

卒業後の私の立場は公的にも私的にも多少変化が生じた。栃木県森林審議会委員、栃木県土地利用審査会委員など自治体での政策決定の場や全国林業女性会の理事に推挙されるなど、全国的な組織の中に組み込まれてしまった。折りしも、義父が急逝し、家業の林業経営にまで参画しなければならない状況にも追い込まれ、これまで机上でしか知らなかった制度や現場に否応なく立ち会わざるを得なくなった。樹齢100年近くのスギの丸太の販売価格が、2万円くらいにしかならない現実に直面していまさらながら驚いている。現在販売されている木材はほとんどが伐採経費と工場の加工代金だと考えていい。しかしながら、木材の材質は人体に有効なので、是非新築やリフォームの節には、木の無垢材の利用をお勧めしたい。業者は黙っていると加工の簡単な集成材や合板材の加工品やクロスを使って手軽に済ませたいことを、私も自宅のリフォームで経験した。工業製品が高度化する時代だからこそ、模造品でない自然な本物のよさを是非感じて欲しいとの思いを強くしている。

出口の見えない林業政策と国土の有効利用という開発型の土地利用政策、過重な土地税制など、一度に多くの難問がパズルを張り合わせるように対処しなくてはならない現実に直面している。ご存知のように、日本は中央集権国家で全ての基本計画は国で決定され、その基本計画の基で、県や市町村が県及び市町村で基本計画を作成し、現場で対応している。市町村にいたってはほとんどが移管事務で、独自の政策は取りにくいのが現在の状況である。と同時に、それを言い訳に地域の実情に合わせた地域住民重視の政策立案を忘れていた感も否めない。機能不全に陥っている国政や財政状況と考え合わせても、言葉は硬いが地方分権による地域住民主体の政策決定の方向に向かわざるを得ない状況になっていることを、つくづくと感じるこの頃である。

国際学研究科に学んで、生活のあらゆる場で国際的な視点が必要であることに気付く。産業や経済のグローバル化ばかりではなく、環境への配慮が国際間の最重要課題となりつつある。京都議定書の実行へ向けて国家間の取り組みが求められている状況で、国内の産業構造が大きく変化する可能性がある。自然に配慮した無駄のない生活の実現を期待したいと切に思っている。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第1期修了生)

重要

◎ お知らせ

「みなくるねっと」の受信メールが昨年9月から使用できない状態にあり、システム老朽化のため同年12月25日を持ってサービスの停止になりました。就きましては、このたび「Yahoo!グループ」に掲示板を移管しましたので、よろしくお願い致します。メールアドレスは、従来の global@minakuru.net から chikyukai@yahoogroups.jp へ変更しましたので、お間違いのないようお願い致します。

◎ お願い

「みなくるねっと」のサービス停止に伴い、受信メールに提出いただいた修士論文要旨がダウンロードできなくなりました。「みなくるねっと」へ送信いただいた会員の方は、恐れ入りますが再度、「Yahoo!グループ」に送信をお願い致します。また、まだ未提出の方も併せてお願い致します。

編集後記：限られた時間でニュース発行、同窓生の皆さんのご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い：** **住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。** chikyukai@yahoogroups.jp
